COLUMN

お金のあんしん

FPの視点から～第２回目～

佐藤　益弘（さとうよしひろ）　ファイナンシャルプランナー（ＣＦＰ® 認定者）
株式会社　優益FPオフィス　代表取締役

チャンスをつかむために必要な「ライフプラン」！

みなさんは、これは「千載一遇のチャンス」！と思えたことがありますか？今回のコラムでは、この「千載一遇のチャンス」について、FP的な視点から検証していきます。

そもそも「千載一遇のチャンス」の意味ですが……「滅多に訪れそうもないよいタイミング」や「二度と訪れないかもしれないと思えるほど恵まれた状態」のことを言います。正確にどういう時が「千載一遇のチャンス」なのか？は、人それぞれによって違います。

つまり、「千載一遇のチャンス」は、事前に、具体的に認識していないと、中々巡り逢えないということです。“後から”ハッと気付き、後悔することが多くなるわけです。

人の一生って、どれくらいあるの？

講演で、「千載一遇のチャンスは、どれくらいあると思いますか？」と質問すると、「1,000年に1度、偶然訪れるくらいの好機」と捉えている方が多いようです。

では、実際、どうなのでしょうか？まず、人の一生を計算してみましょう。

例えば･･･年金受給から30年、95歳まで生きられるとしたら･･･

- **何日間、生きられますか？→34,675日（＝95年×365日）→約3.5万日**
- **何時間、生きられますか？→832,200時間（＝日×24時間）→約83万時間**
- **何秒、生きられますか？→2,996,920,000秒（＝分×60秒）→約30億秒**

みなさんは、どういう心証を持たれますか？

人生100年時代といわれますが、少々割り引いて、95歳としても、私たちの一生は、大体3.5万日程度です。秒でいうと30億秒になります。

実は･･･「千載」とは？

「千載」の「載」というのは、数字の単位です！
1載は、何と「10^{44}」です。ですから、1000載（千載）は「10^{47}」ということになります。

実際に書くと、千載一遇　＝千載分の一 は……こんな感じです。

$$\frac{1}{100{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000{,}000}$$

となります。

では、一生に何回あるでしょう？

先ほどの試算では、人の一生は約30億秒･･･10の9乗の単位ですから、数値的には10^{38}（$10^{47}-10^{9}$）という途方もない差があり……勝手に、黙って、巡ってくるモノではない！ということがわかります。

自分自身で掴んで行かないといけないと、一生で1回も巡りあえないレベルです（泣）。

「千載一遇のチャンス」に巡りあうには？

「幸運の女神は前髪しかない」と言われます。

これは、先回りをしていないと幸運（チャンス）は逃げていってしまう＝後ろから追いかけても幸運の女神の髪の毛は捕まえられないよ！という意味の格言です。

中々巡り合えないとここまで言っておいて不思議ですが……人によっては、千載一遇のチャンスが何度も訪れる方もいらっしゃいます。これは、千載一遇のチャンスを、“将来予測”をして、“事前準備”をしているタイプの方に多いようです。

先行きの見えづらい世の中で、自分自身が何年後にどのような状況になっているか？を予測する将来設計～「ライフプラン」を事前に持っていると、納得した選択が出来て、自分にとっての「千載一遇のチャンス」をイメージしやすくなります。（例：就職先、家の購入、貯蓄の方法など。）

そういう意味からも・・・自分自身の「ライフプラン」を是非、持ってくださいね。

LOVEめぐろ　～めぐろを知って好きになろう～

目黒の「さんま」

あまりに有名な話ですが、「目黒」といえば「さんま」。じゃあなぜ海のない目黒で「さんま」なのかというと、ご存じのように、むかし殿様が鷹狩に出かけて、出かけた先で、たまたま旬の「さんま」、煙もくもくと焼いたものをふるまわれて、殿様はその味が忘れられなかった、その場所が目黒だったという落語「目黒のさんま」が土台になっています。

じゃあ全くのフィクションかというと、実は地元にその歴史が記されています。

中目黒駅から山手通りを南に向かい目黒警察署を過ぎたら信号を左折、目黒川を渡っていくと、右に清掃工場が現れ、その清掃工場を過ぎて右に入ったあたりに、昔の茶屋坂があったそうです。今もバス停は「茶屋坂」となっています。

この坂の上に、地元の彦四郎という人物が開いた茶屋があったそうです。徳川時代、三代将軍家光や八代将軍吉宗が狩猟の折、目黒方面に出かけてきてその度にこの茶屋で休んだといいます。家光はこの彦四郎を「爺、爺（じじ、じじ）」といって親しく話しかけたことから、この茶屋は「爺々が茶屋」（じじがちゃや）と呼ばれ、歌川広重の絵にも描かれるほどよく知られるようになりました。こんなことから、これが落語の題材になり、「目黒のさんま」が誕生したのではないかといわれています。
ただ、落語のようにお殿様にさんまを献上した記録はないそうです。

コロナで外出も遠出もままならないこの時期、近所を散策しながら、地元に目を向けると、意外な発見があるかもしれません。

梅田まさみ プロフィール

目黒区生まれ目黒区育ち。東根小学校、目黒10中、日大鶴ケ丘高校、玉川大学卒業
ファイナンシャルプランナー（CFP）、防災士
3つの安心（いのちの安心・お金の安心・老後の安心）が重要と考え、日々奮闘中。
【梅田 まさみHP】 https://umeda-mm.net/